進路情報

令和6年度
第１号

# DREAM

岡崎盲学校
進路指導部
編集・発行

## 【チャレンジ体験を終えて】

中学部教諭

中学部では、「働くことへの意識の向上を図るとともに職業観、勤労観を育くむ」ことを目的とした「チャレンジ体験」を毎年3年生の生徒を対象に行っています。今年度は岡崎市にある就労継続支援A型事業所「夢見草」で、2名の生徒が実習させていただきました。

「夢見草」ってどんなとこ？

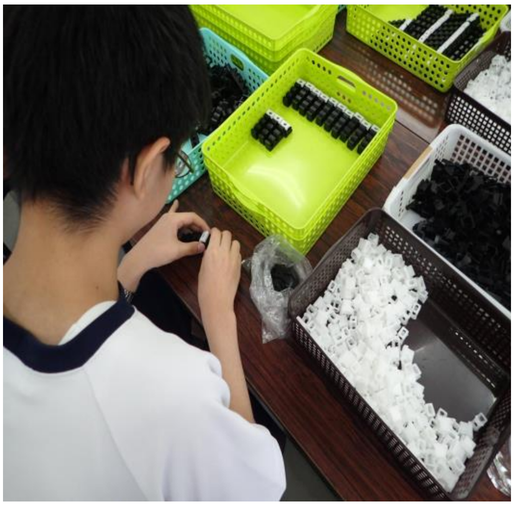
- 就労継続支援A型施設
- 運営方針：「一般企業に近い福祉事業所」としてのサービス提供を行い、障害のある方たちの人間性・社会性の向上を目指して支援する。
- 就労時間：午前 9：30～11：45（2時間15分）
  午後12：30～14：30（2時間）
- 昼休憩：11：45～12：30
- 仕事内容：自動車部品の製造、パソコン作業等
- 工賃（給料）：1，077円／時間（現在の愛知県の最低賃金）
- 昼食：外食、弁当持参、宅配弁当注文など自由
- 通勤方法：自家用車利用、名鉄本線「宇頭駅」または
  愛知環状鉄道「大門駅」からの無料送迎サービスあり。

＊「夢見草」での経験を経て一般就労される方もいらっしゃる。

・Aさん

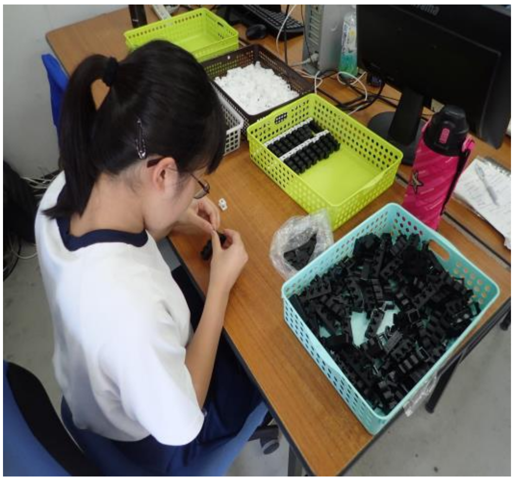
初めて働くという事を体験してみて、作業内容は慣れれば、それほど難しいことではなかったです。自分の課題は人ともっと話せるようになることだと気が付きました。

これからコミュニケーションがうまくとれるようになりたいと思いました。



・Bさん

体験に行く前は働くことのイメージがわきませんでした。実際に働いてみて、始めは検品作業の合格ラインが、分かりにくくて不安でした。3日間の体験で働くということは、思っていたより楽しいものだと感じました。



就業体験のない2人が、初めて知らない方の中で「働く」という貴重な体験をさせていただき、社会と触れることができました。今までとは違った角度から自分を見つめなおしたり、自分の進路について考えたりする良い機会になりました。

# 【前期産業現場等における実習について】

高等部普通科教諭

　今年度6月～7月にかけて高等部普通科2・3年生を対象に産業現場等における実習を実施しました。4か所の実施場所を実際の仕事内容を含めて紹介していきます。

## 1　パッソ豊田校（就労移行支援・豊田市）

　活動内容は、漢字変換に必要な漢字を身に付けるための漢字プリント、オフィスワークの基礎となるコミュニケーション能力を身に付けるためのグループワーク、企業からお願いされた部品などの組み付けを中心に行う軽作業、パソコン検定の練習などです。パソコンの技能を上げることを中心に行っているため、Word や Excel の基本操作ができると検定合格により近づき、就職へ有利となります。実習は5日間行い、生徒は「とても充実した5日間だった。」と話していました。

## 2　就労支援すぷらうと（就労継続支援 B 型・幸田町）

　活動内容は、不要書類のシュレッダー、書類整理（ステープラーを使って書類をまとめる）、ペーパーカッターを使って新聞紙の切断などです。他にも書類スキャンや箱折りなど本人の実態から実際に事業所で行われている活動を行わせていただきました。視覚障がい者の実習の受け入れが初めてだっ

たので、どのように進めていくか、周りの環境をどうするか考えてもらい3日間行いました。実習を行った際は、利用者が10名程度だったので、とても静かな環境で作業を行うことができていました。実習を行った生徒は「1日目は緊張したけど、集中して行うことができた。3日目は疲れたが色々とサポートしてくださりありがとうございました。」と話していました。すぷらうとは、今年9月から就労移行支援を立ち上げ、一般企業の障がい者雇用の橋渡しを積極的に行っていくと話がありましたので参考にしてください。

3　三菱 UFJ ビジネスパートナー株式会社（特例子会社・北名古屋市）

活動内容は、封筒処理（重さの分別、束づくり、宛名書き）、グループワーク、講義（職業準備性について）、公的調査（実習生用の作業）などです。基本的にパソコンを使った操作が多く、書類を確認しながら行う仕事があり、普段使用しているポイント数より小さい字を見ながら行わなければならず視覚補助具を有効的に活用する必要がありました。電子ルーペや携帯型拡大読書器の使用方法を日頃から確認し、いざというときに使える技術を身に付けておくとよいでしょう。企業からは、「作業スピードを求められるが、自分の障がいについてやできないことを伝えるなどコミュニケーション能力がとても重要である」と伝えられました。5日間実習を行った生徒は「心身ともに問題なく楽しく作業をすることができた。卓上の電子ルーペがあると見えやすく作業もやりやすかった。」と話していました。

4　珠藻荘（入所施設・豊橋市）

活動内容は、個室での自由活動、屋外散歩、施設内散策、歩行などです。今回の実習では、食事やトイレ介助の様子、歩行（行動）の様子を中心に施設の方に見ていただきました。施設の都合で実習は１日でしたので、夜間や入浴介助、宿泊の様子を含めて、また実習を行わせていただけるように検討していきます。

5　さいごに

前期産業現場等における実習は2、3年生対象のため、限られた実習場所しか紹介できませんでした。どの活動においてもコミュニケーション能力がとても大事で、自分から積極的に話しかけたり、報告・連絡・相談をこまめに行ったりする必要があります。日頃から分からないことや困ったことがあったら、先生や保護者の言葉かけを待つのではなく、自分から声をかける習慣を身に付けましょう。11月中旬から後期産業現場等における実習です。普通科1年生も対象となります。より多くの事業所の情報を学校から発信していきます。また、大学などの進学を目指している生徒についてはオープンキャンパスなどを活用して今のうちから雰囲気や学習内容を知っておく必要があります。夏休みのように長く時間をとる機会は少ないかもしれませんが、インターネットを活用するなど工夫して情報を収集してください。こちらにおいても学校へご相談いただければ可能な範囲でお伝えできることがあるかもしれませんので、気軽にご相談ください。

# 【 宝島 】

高等部理療科教諭

みなさんこんにちは。前回までの「宝島」を読んでいただきありがとうございました。それなりに時間をかけて原稿をしたためてきたつもりでしたが、後になって「もっとこれを詳しく書けばよかった」とか、「勢いに任せて書いてしまったな」と反省しました。しかし、子供のころには表現できなかった気持ちを表すことができたり、自分の人生を振りかえったりする良い機会となったことで、今後についていろいろと考えることもできて感謝する気持ちももてました。今回は高等部普通科時代の前半についての内容です。私と同じように、本校で普通科まで過ごしたみなさんであれば「あるある」かもしれませんが、保護者の皆さんや先生方、専攻科のみなさんにとっては「こんな風に感じているんだな」と思う方もいることでしょう。今も昔も私たち視覚障がい者が抱える進路選択の問題を知っていただきたいという思いが強くて、反省をしつつも今回もボリュームたっぷりになってしまいました。

## 10　高校生になって

当時は精一杯受験勉強に取り組み、名古屋盲学校高等部の普通科の入学試験に合格できたことを素直に喜んでいました。この入学試験では忘れられないエピソードがあります。それは面接試験での出来事でした。

面接官から「もし、不合格だったときはどうしますか？」という質問がありました。その時の私は「不合格」など、それまでの周囲の空気や自分自身の思いとしてもあり得ないことだと考えていたので、そのまま「不合格はあり得ません」と答えました。面接官からは再度同じ質問がありましたが、「不合格は考えられません」というように、使う言葉を変えるだけの回答を繰り返していました。このようなやり取りは、２、３度繰り返されたでしょうか。当時は普通科が不合格だった場合、保健理療科への入学が可能になるという非常にありがたい計らいが存在したのですが、そのときの私はそれを知るよしもなく、なすすべもないといった感じでした。面接後に母親から「もう少し違う答え方をすればよかったのに」と、苦笑いされました。おそらく面接官も面接中に苦笑いしていたのでしょう。実際に入試でどのくらいの点数が取れていたのかはわかりませんが、無事に合格して新たな生活が始まりました。

ここから３年間の高校生活がスタートするのですが、この間に私は三つのテーマについて強く感じたり、深く考えたりすることになります。

一つ目は、「将来の仕事について」です。二つ目は、「同世代の友人と自分の比較」です。三つめは、「自分が障がいをもっていることは不利なことなのか」です。

三つのテーマといってもきれいに分けられるわけではなく、それらが複雑に絡んだ様々なエピソードや体験を通して成長していきます。で

も、まだまだ成長は必要になるということを、専攻科に進学してからも感じます。この後に記す文章から、そんな私の気持ちを読み取っていただけるとうれしいです。

## １１　現実を知ることは傷つくこと？

　小学部５年生のとき、非常にユニークな先生が名古屋盲学校に着任されました。例えば、ガンダムのプラモデルを作って触らせてくださったり、ディズニーのキャラクターをプラ板にしてくださったりなどして、これまで知りたいと思っていたことをいろいろな方法で教えてくださいました。そして、その先生が私たちに教えてくださったものの中に、サッカーがありました。

　サッカーと言ってもみなさんが想像されるような「ブラインドサッカー」ではなく、運動会などで使う大玉をお互いのゴールに入れるというものでした。二つのチームに分かれ、その中で弱視生と全盲生がペアとなってプレイします。弱視生は手を使うことが禁止され、全盲生は手を使っても良いというルールでした。まさに「大玉サッカー」でした。初めのうちはボールを抱きかかえたり乗っかったりするなどして、独り占めしてお互いのゴールを目指すことしかできませんでした。手を使ってはいけないというルールにも驚きましたが、戦術として見方にパスしたり、そのパスを受け取るために自分が動いたりするという発想は、私たちの誰もがもっていませんでした。ところが先生のプレイは、左右・前後に動いて私たちを交わし、ゴール近くにいる友人にパスするというサッカーなら当たり前の動きでした。私たちがこれまでに経験してきた球技は、定位置でボールを蹴ったり打ったりする、定位置でそのボールをキャッチするというもので、ゲームが始まってから定位置を動くとい

うことは初めての経験でした。今までと全く違ったスポーツに、私や多くの友人が魅了されました。そのうちに弱視生と全盲生のペアもなくなり、全盲生も手を使ってはいけないというルールに変更されました。全盲プレイヤーと弱視プレイヤーのできることがそれぞれ制限されていることに対して、対等ではないという気持ちをもっていたことや、キャプテンや主要となるプレイヤーは必ず弱視生が務めていることなどを不満に思っていた私ですが、どんどんこのスポーツが好きになっていきました。どこでどんなプレイをしてもいいし、弱視生と全盲生が直接ボールを取り合って争えるし、勝ちたければ自分自身がボールを持ってがむしゃらにゴールを目指すこともできるなどが私にとっての強い魅力でした。このスポーツの虜になってしまった私は、その後普通科に入ってもサッカーに対する情熱を持ち続けました。ちょうど中学部の頃に「キャプテン翼」というサッカーアニメが大流行したことも強く影響します。特に、そのアニメで主人公のライバルとして登場した、心臓病を抱えている登場人物にひかれていました。さらに追い風となったのは、中学部に入った頃に molten というメーカーから「メロディーメイト」というサッカーボールが発売されたことです。このボールにはショックセンサーという特殊な装置が埋め込まれており、ボールがバンドしたり蹴られたりする衝撃に反応して、何曲かのメロディーが流れます。残念ながら現在は、生産完了となってしまったので、手に入れることはできません。このボールの良いところは、空中を飛んでいても音が鳴り続けているので、その音を頼りに落下地点に走

り込んでボールをコントロールできるようになったことでした。この他にも私がサッカーを上達させることができたのは、二つの理由が考えられます。

　その一つは、名古屋盲学校のグランドを好きなときに好きなだけ使えたということです。盲学校に入学していたからというのはもちろんですが、入舎していたからこそ朝早くから夜遅くまで好きなだけグランドを使うことができました。サッカーだけではなく、この影響で基礎体力も向上させることができたと思います。二つ目の理由は、サッカーのことをいろいろ教えていただいた先生がいたことです。この先生が専門的にサッカーを知っていたというわけではなかったのですが、仕事の合間を縫ってよく練習相手になってくださいました。ちなみにこの先生は普通科２年生で担任をしてくださいますが、他にもいろいろなことに関わってくださったりします。小学部のことを書いた記事の中に、担任の先生が私の上司となったということを書きましたが、この先生もやがて私の上司となり、岡崎盲学校の校長を務めます。

　このようにして、私はますますサッカーにのめりこんでいくと共に、自信もつけていきました。アニメの影響が非常に大きかったと思いますが、好きという気持ちさえもち続けていれば奇跡が起こせるとすら考えていました。サッカーを好きになって１年くらいたったとき、初めて通常のサッカーに近い形でゲームを行いました。もちろんそこで使用されたボールはメロディーメイトだったのですが、ボールに絡んだプレイが思ったようにできなかったため、隠れて悔し涙を流したことがありました。しかしそのときは、自分のサッカーに対する好きという気持ちが少ないことや練習量が足りていないことが原因だと考え、なお一層情熱を燃やして練習に励みました。視力の差など、努力でなんとかできるとさ

え考えていました。野球やバレーボールは空中を飛んでくるボールを打ったりとったりするスポーツなので、当然それを視認できなければプレイできません。それに対してサッカーは、転がるボールもあれば、ドリブルして自分の足元にさえボールがあればプレイできます。自分の努力と気持ちさえしっかりしていれば、視力のあるなしなどプレイにさほど影響しないと考えていました。ところが普通科１年の秋、私のサッカーに対する思いと、自分の自信や考えを一変させる出来事がありました。

担任の先生から「そんなにサッカーが好きなら、一度本物のサッカーをしてみませんか」と声をかけられました。それは担任の先生が前任されていた県立Ｓ高校のサッカー部で練習を体験するというものでした。今思えば無謀な体験だと思いますが、当時の私にとっては心躍るような非常にうれしい出来事でした。一方で、担任の先生が何を狙いとしていたのかは今も分かりません。ある週末の業後、その高校へと向かいました。その高校のグランドは段々畑のようになっており、頂上に校舎が並んでいました。簡単に校内を見学させていただき、いよいよサッカー部の練習するグランドへと向かいました。そこで目の当たりにしたものは、私の想像とはまったく違うものでした。私の頭の中では、ほとんど対等にボールを取り合い、ゴールさえ決められるかもしれないと考えていました。ところがそこにあったのは、私の知っているサッカーとはまるで違うスポーツでした。選手同士の距離が近くて体と体が激しくぶつかり合うこと、一つのボールに３、４人が常に群がっていることなどに面食らいました。何よりもボールが移動するスピードも人が移動するスピードも自分の想像をはるかに上回る速さで、常にそれが連続してプレイが展開されていくことに驚きました。持参したメロディーメイトで少

しだけ練習させてもらったのですが、ボールに触ることはおろか、自分がどこにいるのか、他の人が何をしているのかも分からず、ただただ音を聞きながらなんとなくその方向に走ることしかできませんでした。その後ＰＫを経験させてもらいましたが、私にはなんの感情もわいてきませんでした。「傷ついた」、「悔しい」、「むなしい」などの言葉では表せない気持ちでした。泣き出したいような感情がわいてきましたが、不思議と涙は流れませんでした。先生と別れて帰宅し、自宅で自分の部屋で一人になった時に涙が出てきました。その涙の意味でさえ、「悔しい」とも「悲しい」とも違い、自分自身に説明のつかないものでした。だんだん落ち着いてくる中でおぼろげに浮かんできたのは、「健常者と対等の立場で何かをするということは、こういうことなのか」と、具体的に表現することができない、厚い壁のような、深い谷のような、とらえどころのない気持ちでした。しかし一方では、心深く傷ついたというわけではなく、なんとなく分かっていたような、だけど分かりたくないような、そんな冷静な気持ちも感じていました。

　現代ではあまりないことですが、盲学校では「負けない」という思いや言葉がよく先生方から語られました。それは、「自分の障がいに負けない」とか、「健常者に負けない」とか、その時その時で変わりますが、そのあとにつくのは必ず「頑張ろう」でした。ですから、負けないためには努力するのは当たり前だと思っていましたし、負けることは努力が足りていない結果だと思っていました。先に、「担任の先生が何を狙いとしていたのかは今も分かりません。」と書きましたが、私にとっては健常者と障がい者である自分、障がい者である自分と健常者という、この後一生考えることになる現実を意識した初めての経験となりました。ひょっとしたら、普通科１年生の担任の先生は、私の日常的な言

動や行動から将来を危惧し、この時点で現実を理解する機会を作ってくださったのかもしれません。また、「努力」とか「負けない」という意味を、広く・深く考えることを促してくださったとも考えられます。

　お気づきの方もいらっしゃると思いますが、この時の私はスポーツなどの全身を使った運動の獲得には、他の人が行う模倣が大切であることを知りませんでした。特に私のような幼いころから人の動きをはっきりと視認できていない視覚障がい者にとっては、この点に関する理解や獲得は非常に大きな課題です。まして、そのことに自分自身が気づいていなければ、言葉だけの説明による動きが正しくできていると思い込んでいるので、まったく疑うことなく生活しています。思い起こせば、「手を振って、膝を高く上げて、走る」、「大きく振りかぶって、流れるような動きからボールを投げる」など、子供のころから指導されてきたと思いますが、それを獲得して正しいフォームで運動することは今もできていません。私自身がこのことに気づいて意識するようになったのは、専攻科で筑波大学附属視覚特別支援学校に進学したときにご指導していただいた体育の先生に出会った時です。このエピソードについては、専攻科時代の記事で紹介したいと思います。

## 【 進路を考える… ということ 】

進路指導主事

現在、進路指導部では、進路に関わるリアルタイムな話題や情報を、岡盲公式ブログに毎週掲載しています。特に視覚障がい者の卒修後について知っていただきたいことや進路相談等で質問のあった内容を中心にお届けしています。こちらも[進路情報 DREAM]と併せて進路を考える際の参考にしていただければと思います。

以下に、これまで反響のあった過去のブログから一部抜粋して紹介します。

### < 企業で実習する覚悟 >

令和3年度、普通科卒業生でドラッグストアに就職した女子生徒がいます。高等部2年生から計3回の実習を経て採用に至りました。本校の高等部普通科からは16年ぶりの就職です。

学生時代の実習では現在の仕事と同じく、商品陳列と清掃、接客を主に行いました。一生懸命、自分の任された仕事を頑張っていましたが、高3年時の実習終盤に一人のお客さんから、接客に関して注意を受けてしまいます。しかし周りのスタッフが初めから間に入って助けてくれるわけではありませんでした。小売業を始め理療業など、客を相手にする仕事ではよくある出来事ですが、それにどう対応できるかを確認するためです。

高等部の「産業現場等における実習」では、成功体験で終わらせることの多い中学校の職場体験（本校では中学部3年のチャレンジ体験）とは異なり、卒修後の採用を判断する機会でもあります。現場のスタッフも、同じ職場で働く予定の仲間だと思って接します。

本校の就職希望者の多くが実習を行うサービス業（理療業を含む）については、障がい者雇用であっても、単純に指示されたことをするだけの受け身の姿勢では採用されません。実際に職場に入れば、接客対応は自分で判断して行う必要があります。これまでのコミュニケーション学習の成果が試される機会です。しかしドラッグストアで実習した生徒は、他人から強く注意を受ける経験は初めてだったので、驚いてしばらく気持ちが落ち込んでしまいました。

しかし、その翌朝は笑顔で「おはようございま～す!!」と元気に挨拶して出勤することができたとのことです。そして、その後の仕事も実習最終日まで一生懸命に取り組みました。

実は、この一連の出来事が最も評価されたことの1つでした。接客対応で注意を受けた後、しっかり謝り、何が良くなかったのかを考え、身近なスタッフにアドバイスを求め、負の感情を長く引きずることなく明るい表情で接客を続けました。そして、みごと多くの実習生の中から内定を勝ち取って就職することができたのです。

企業への就職は、福祉施設とは異なり、“利用”ではありません。周りの方たちが優しく接し、様々なことが配慮されているわけでもありません。「産業現場等における実習」については事実上の採用試験だと考え、最大限の努力と共に、多少の困難に負けない強い意志をもって仕事に取り組む覚悟が必要となります。

## ＜ 障がい支援区分 ＞

「障がい支援区分」とは、障がいに関わる支援の度合いを表す 6 段階の区分で、卒修後、一部の福祉サービスを受けるために必要になるものです。[非該当]を除けば、[区分1]が支援の度合いが最も低く、[区分6]が最も高くなります。支援の必要性に応じて適切な福祉サービスが利用できるように導入されました。逆に考えれば、支援の必要性が認められない場合は、たとえ希望してもその福祉サービスを利用することができないということになります。

障がい支援区分を必要とする成人の福祉サービスには、生活介護、短期入所(ショートステイ)、施設入所などがあり、それぞれに利用可能な支援区分が設定されています。

これらの福祉サービスを、卒業後すぐに利用する予定のある生徒は、18歳になる1～3か月前に、保護者と共に認定調査を行い、医師の意見書と合わせて区分を判定します。なお、それまでに相談支援員と契約していない場合は、保護者側から直接、居住市町の障がい福祉課に連絡して区分判定の手続きをする必要があります。

障がい支援区分と利用できる主な福祉サービス（着色部分が利用可能な区分）

| | 非該当 | 区分1 | 区分2 | 区分3 | 区分4 | 区分5 | 区分6 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 短期入所 | | | | | | | |
| 居宅介護 | | | | | | | |
| 同行援護 | ※条件により 非該当・区分1から | | | | | | |
| 行動援護 | | | | | | | |
| 生活介護 | | | ※50歳以上は区分2から | | | | |
| 施設入所 | | | | ※50歳以上は区分3から | | | |
| 療養介護 | | | | | | ※条件により区分5から | |

誕生日の早い生徒については、高等部2年生の段階で認定調査を受けます。事前に医師の意見書等の書類を用意することになりますので、準備時期にも注意してください。

認定調査をする場所は、生徒本人が最も落ち着ける場所という事で自宅が選ばれることが一般的ですが、希望により自宅以外を選択することもできます。また必要に応じて福祉課より公共の事業所が指定されることもあります。

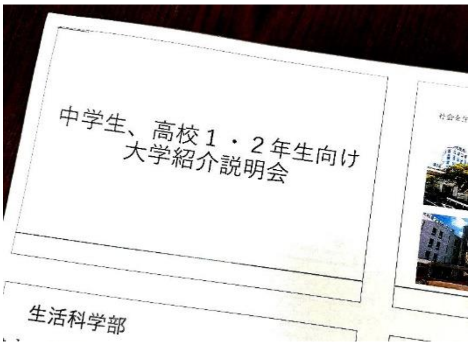
なお、盲学校の在学生であったとしても、認定調査員には視覚障がいに詳しい方が選ばれるというわけではありません。特に視覚の判断については、行動観察だけでは分かりにくいことも多く、保護者からの聞き取りが重要になります。移動や動作、行動障害等に関連する80項目の調査がありますので、1つ1つの質問に対して、単純に「できる」・「できない」だけではなく、どういう状況の時にできないのか、またどういった支援があればできるのか・・・等を具体的に伝えることで、正しい判定のもと 適切な福祉サービスが受けられるようになります。

## ＜ 大学のオープンキャンパス ＞

大学を志望する高校生の参加が一般的になりつつあるオープンキャンパス。学校説明会をはじめ、模擬授業やキャンパスツアー、個別相談会など、様々なイベントが用意され、大学要覧やホームページでは分かり難いキャンパスの雰囲気をリアルに感じることができます。

学習アプリを運営するスタディプラス(株)の昨年度のアンケート調査では、高校2年生までに88.7%の生徒がオープンキャンパスに参加した経験があり、中学生でも 10.3%が参加しているという結果が出ています。また反対に受験直前の高校3年生では参加の伸びが少ないという状況でした。

※出典:「大学のオープンキャンパスに関する調査」スタディプラス・トレンド研究所




大学によっては、中学生向けの講座も開かれるなど、早い段階からの参加を勧めています。

個別相談会では、視覚障がいについての配慮や支援についても確認することができます。障がいの内容によりサポート方法は大きく異なりますが、教科書の点訳体制や筆記支援、対応できる視覚補助機器や学内の移動など、支援の可否や方法についてしっかり相談しましょう。 ※参考として、視覚障がい者の入学実績のある県内の大学について、学校で把握している範囲で以下に掲載します。

[愛知教育大学、愛知県立大学、名古屋市立大学、愛知大学、愛知産業大学、
愛知淑徳大学、桜花学園大学、金城学院大学、同朋大学、名古屋外国語大学、
名古屋芸術大学、南山大学、日本福祉大学]

多くの大学では、学食の体験利用もできます。職員が準備する盲学校の給

食とは異なり、大学の食堂では自分で食品棚から小鉢を取り出したり、好きなメニューを告げてトレーで受け取ったりと利用方法は様々です。お金の支払い方も含めて確認する必要があります。

また、入学後の学生生活をイメージできる場の提供として、多くの学生が集うカフェや図書館、購買ショップなどの学内施設についても利用することができます。

近年は気軽にオープンキャンパスに参加できるよう、スタンプラリー等のエンターテイメント要素を取り入れる大学も増えています。参加者からは「内容が充実していて学部選びを真剣に考えることができた」といった感想や、「勉強に対するモチベーションが上がった」、「将来、何の職業を目指したいか考えるきっかけになった」等のポジティブなアンケート回答をする生徒が多いとのことでした。

大学への進学を少しでも検討している場合は、ぜひ早い段階でオープンキャンパスにご参加ください。

## ＜ 視覚に障がいがあっても仕事の可能性は∞ ＞

先日、"盲目のピン芸人～濱田祐太郎"さんのトークライブを観に行ってきました。中途で視力がほとんどなくなった濱田さんは、視覚特別支援学校で三療の国家資格を取得したのち、理療業で生計を立てながら中学時から夢である漫談家を目指します。そして 2018 年に一人芸の全国コンクール「R1 グランプリ」で優勝し、現在もプロの漫談家としてラジオや舞台を中心に活躍されています。

濱田さんが芸人として話す自虐的な生活エピソードからは、あまり苦労を感じさせる言葉は出てきません。しかし、このような舞台に立つまでの努力は相当なものだったと想像できます。そして濱田さんの存在を間近で拝見し、日常生活に関わる体験談を聞いていると、視覚に障がいがあっても確固たる想いと努力によって、生活の困難や仕事の垣根は乗り越えられることを強く実感させられます。

全盲の～ ピアニスト:辻井伸行さん、弁護士:大胡田誠さん、精神科医:守田稔さん、小説家:米田京さん、彫刻家:三輪途道さん、映画監督:加藤秀幸さん、県立学校教師:鎌田昌芳さん…いずれも奮励して夢を叶えた方々です。

視覚に障がいがあっても、仕事の可能性は∞(無限大)です。ただし夢を実現させるためには、"努力すれば"という条件が必ず付きます。